

【書評・紹介】

クッキー・シーン編集部 (編)  
『北欧 POPMAP スウェーデン編』  
『北欧 POPMAP アイスランド、ノルウェー、デンマーク、フィンランド編』  
(2冊同時刊行)  
(東京, 株式会社ブルース・インターアクションズ, 2007年10月, 各173頁, 各2200円+税)

沖野慎二

表紙画像

### 1. 「そよ風」? 「強風」?

先日、新聞にスウェーデンの歌手ミラの CD 評 (天辰, 2008) が掲載されていた。見出しには「春を運ぶ温かな歌声」、本文には「スウェーデンの澄みきった空気と、草のにおいを含んだ穏やかな風を感じながら」とあった。ところが、スウェーデンに留学経験のある妻にそれを読み聞かせたところ、即座に「えっ? スtockホルム (スウェーデンの首都)、けっこう風強いよ!」と一蹴された。そういえば、評者の父が仕事で最後に赴任した道南、江差町の海 (日本海) も荒天時は確かに演歌の素材になりそうな強風で波高き海だったが、好天時はこの上もない穏やかな海であった。先ほどの CD (ミラ, 2008) (日本盤) の帯にも、「スウェーデンのそよ風がはこんで来た、ナチュラルなボサノヴァの妖精」とあるように、たとえ現地が悪天候であろうが何であろうが、スウェーデンならばあくまでも「良いところ」らしい。しかし、スウェーデン音楽が「そよ風」で、演歌が「強風」などと決めつけては両者ともに心外 (?) であろう。以前テレビ東京系列で放映 (1978年~2000年) されていた歌番組『演歌の花道』でも「浮世舞台の花道は表もあれば裏もある」と声優・来宮良子氏の語りがあつたではないか。

しかしながら、わが国における「北欧」像は限りなくポジティブで「理想型」に近いようである。例えば、渡部 (2006) は過去の深刻な経済不況や現状の問題点をふまえつつ、衣食住の様々な場面に見られる「北欧デザイン」について概して肯定的なとらえ方をしているし、今年初頭の『週刊東洋経済』の特集 (並木厚憲ほか, 2008) などは、「高福祉」「デザインの先進国」「高い国際競争力」「男女参画」「ノーベル賞」「フィンランド式教育」など美辞麗句 (?) のてんこ盛りである。なお、最近流行? の「音楽療法」の分野においても北欧は先進国 (芹澤, 2004a, 2004b) らしい。多くのマスメディア (例えば、『日本経済新聞』やテレビ東京系列のニュース番組『ワールド・ビジネス・サテライト (WBS)』、各テレビ局制作の様々な現地取材ドキュメンタリーなど) を通してわれわれが知る「北欧」は、オーロラやフィヨルド、森と湖などの大自然を背景にサンタクロースやムーミン、アンデルセン文学に親しみ、レゴを組み立て、ロイヤルコペンハーゲンの食器を使う、マリメッコのバッグにノキアかエリクソンの携帯電話を入れ、環境に配慮したバイオガスで安全性の高いボルボかサーブの自動車に乗る、老後に不安のない、サステイナブル (持続可能) なスローライフを送る人々の姿か。スウェーデンといえば、往年のポルノ女優クリスティーナ・リンドバーグはさておき (?), 忘れてならない

のは、現代生物学の開祖の一人で、「学名」システム（二名法）を体系化した18世紀の博物学者カール・フォン・リンネや、野外博物館の先駆けであるスカンセン、そして、環境考古学の代表的手法の一つ、「花粉分析」の発祥地でもある。なにやら「北欧」には常に「先進性」という言葉がまとわりつくようである。

## 2. 乏しい情報の中で

さて、前置きが長くなったが、ここからが本題である。今回とりあげた2冊（以下、『スウェーデン編』、『アイスランド他編』と略記させていただく）の帯には、「北欧音楽の最新情報を網羅した、初めての包括的アーティスト/ディスク・ガイド」との一文が添えられ、また、音楽雑誌『クッキー・シーン』最新号（伊藤・編、2008）では、この2冊を「英米や日本のポップ・ミュージックを様々な角度から紹介してきた本はたくさんあるのに、（中略）他では絶対作れない、唯一無二の北欧ポップ・ミュージック・ガイド本」と宣伝している。

評者が最近、世界的通信販売の大手、アマゾンのウェブ・サイトで、「北欧」と「音楽」の2つのキーワードを入力して「和書」を検索したところ、結果はわずか15件、うち2件は本書2冊、9件は芸術（クラシック）音楽関係、2件は東欧など他のヨーロッパ音楽と併せた内容の本、1件は北欧民謡に関するもの、その他1件、と極めて少ない有様であった。これは、わが国の北欧音楽情報の乏しさを端的に表わしている。また、残念ながら最新版は確認していないが、『ニュー・グローブ音楽・音楽家辞典』の旧版（Sadie 1980, 再版 1995）には、デンマーク（第5巻：366-373）、フィンランド（第6巻：585-592）、アイスランド（第9巻：5-10）、ノルウェイ（第13巻：321-328）、スウェーデン（第18巻：398-406）の北欧5カ国に関する記述は比較的豊富だが、いずれもその構成は、Art Music（芸術音楽）とFolk Music（民俗音楽）の二項対立（？）仕立てで、Popular Music（ポピュラー音楽、大衆音楽）についての言及はなく、一方、先住民サーミ（本評では「サーミ」という表記に統一させていただく）の音楽（Samish music）は、やや古めかしい学術的な解説で、それらとは別項目（第16巻：449-452）となっている。さらに、これもやや古くなってしまったが、「ワールド・ミュージック」のガイドブック（Broughton, S. et al., 1994）には、かつての学術的調査で記録・保存された「伝統的な民俗音楽」とともに、消費社会の中でポピュラー音楽や芸術音楽との境界線上にありながらも強い「地域性」と「アイデンティティ」を保持した、近年の北欧（もちろんサーミも含む）音楽を紹介している（同書45-53頁）。

以上のように、われわれが置かれている状況（北欧関連情報の少なさと偏り）を考慮すれば、今回とりあげた2冊の刊行は、編集者の熱意と努力がうかがえる画期的なものといえよう。

本書2冊はいずれも、A5サイズ、約14.0mm厚、重量は約350g、北欧5カ国の国旗を連想させなくもない十字のデザインと配色を基調とした現代アート風のお洒落な装丁で、本文に掲載のカラー写真も比較的豊富である（これらの「見た目」の要素は本文の内容とともに、消費者、すなわち読み手には重要である）。では、肝心の内容はいかがであろうか？

本書2冊の大まかな構成・内容として、まず巻頭に今一番注目のアーティスト（複数組）のインタビューと経歴、ディスコグラフィを配し、音楽以外の北欧関連情報コラム（冒頭で指摘したような自然環境や気候、文化など、よく知られたステレオタイプの記述が多い）が随所に挿入されながら、注目アーティストの詳細情報が次々と盛り込まれ、特に各々のインタビューからは北欧の日常生活・人々の考え方が臨場感を伴って伝わってくるのが大変貴重である。『スウェーデン編』には、アバ（ABBA）や90年代に話題となったカーディガンズ（The

Cardigans)、クラウドベリー・ジャム (Cloudberry Jam) など高名なバンドについての記述もあるが、大半は(おそらく多くの読者には)なじみのない比較的新しいアーティストであろう。『アイスランド他偏』も、今や世界的アーティストとなったビョーク (Bjork) の巻頭記事を除けば同様である。特筆すべきは予想外にアイスランド情報が豊富で、逆にフィンランド情報が少ないことだった。「日本で北欧といえば頭に浮かぶメタルはあえてはずし、…」(伊藤・編, 2008) とあるように、ヘビー・メタル系ロックを背景音楽に演じられることの多い「エアギター」(『アイスランド他偏』 p.167) の世界大会開催地がフィンランドであることと無関係ではないのかもしれない。余談だが、『アイスランド他偏』のノルウェイの章に「マリア・ソルヘイム (Maria Solheim) があって、レネ・マーリン (Lene Marlin) が載っていないのは納得いかない!」とは評者の妻が下した本書の評価の一つである。

### 3. 地域性の表出、先住民文化の影響は?

さて、本書2冊について評者が注目したのは次の2点である。

- 1) 「北欧」らしさ(すなわち、何らかの「地域性」)はあるか?
- 2) 「先住民文化」に関する記述(すなわち、サーミへの言及)はあるか?

評者が北海道民族学会会員だからという単純な理由以外でそう考えたのは、出版元で P-VINE RECORDS を擁する株式会社ブルース・インターアクションズと、編集元の『クッキー・シーン』がともに大手企業(音楽産業)には属さず、それらとは一線を画した活動を行う「インディーズ(インディペンデント)」だからである。P-VINE RECORDS は1975年の創立以来、戦前～現代に至るまでのブルースの音源を数多く発掘・復刻するなど、その音源の充実振りには定評があり、近年は日本の主に60年代以降の埋もれた「情念系(?)歌謡曲」の発掘・再編集・発売に多大な実績をあげている。一方、『クッキー・シーン』は、編集長・伊藤英嗣氏自身の音楽的背景(70年代末～80年代初頭のパンク、ポスト・パンク期の音楽)を原点に、いわゆる「ロック」に限定せず、主流・非主流にもこだわらず、(対象地域も含め)広く「ポップ」という枠で、日頃注目されにくい音楽を雑誌という媒体を通して発信し続けている。「すべての音源はすべからくターンテーブル上(及びCDプレーヤー、パーソナル・コンピュータ内等)で平等に再生表現される権利を有する」という湯浅(2007)の発言に象徴されているように、彼らの編集・出版方針が、前述の素朴な疑問2点に対する解答を少しでも導いてくれそうな気がしたからである。

しかしながら、本書2冊を読み終え、…結論を言えばその期待はほとんど打ち砕かれた。

まず、サーミに言及しているのは『スウェーデン編』p.77、Vapnet のアルバムレビュー1箇所のみである。その部分を引用してみよう。「北極圏を越えたスウェーデンの最北部、トナカイと暮らすサーミ人が住む“ラップランド”と呼ばれる地域に、アイス・ホテルと言う、その名の通りすべてが氷で出来たホテルがあって…」ん? これはサーミ文化の解説ではない! この程度のことなら多くの日本人も知っているはずだ。ついでに付け加えれば、現代のサーミ(サーミ)でトナカイと一緒に暮らしている人は少数派である。また、同レビューには「そんな北欧特有の澄んだ空気を感じさせてくれるのが、この Vapnet だ」ともある。いやまてよ? 評者が20年近く前に訪れたアラスカだって「澄んだ空気」を感じさせてくれたぞ!

では、「地域性」を感じさせる音楽に言及している箇所はいくつあるだろうか? なお、評者がここで想定しているのは北欧の人々になじみのあるフィドル(バイオリン)やチター系の楽器(フィンランドのカンテレなど)、アコーディオンなどを多用する(狭義の)「伝統的な民

俗音楽」である。

まず、『スウェーデン編』には、「フィドル奏者を父親に持つ（中略）トラディショナルなフォーク・ミュージック」（p.47）、「フォーク・ミュージックを基調に（中略）トラディショナルな雰囲気」（p.64）、「スウェーデンの民俗音楽」（p.72）、「トラディショナル・フォーク」（p.78）、「トラディショナル・フォーク風の楽曲」（p.111）、「スウェーデン語のフォーク・ソング」（p.124）、「フォーク・タッチのバラード」（同）、「トラディショナル・フォーク」（p.126）、「トラッド・フォークや民俗音楽」（p.127）など少なくとも9箇所確認できたが、そのうち、評者が文章を読む限り明確にスウェーデンの民俗音楽と特定できたものは、p.47, 72の2箇所と、音源を確認済みのp.126（Kebnekaise）1箇所、合計3箇所のみである。なお、それ以外のはアイルランド、スコットランドなどのケルト系民俗音楽やブリティッシュ・フォーク、アメリカン・フォークなどの可能性も考えられるため除外した。

一方、『アイスランド他偏』は、「トラディショナルな北欧ムード」（アイスランドの Oolf Arnalds, p.58）、「北ノルウェイのフォーク・ミュージック」（前述の Maria Solheim, p.102）、「トラディショナルなフォーク・ソングが（中略）カンテレやヨーヒッコといった聴き慣れないフィンランドの民族楽器が奏でる音色」（フィンランドの Lau Nau, p.166）の3箇所確認できたが、そのうち、明らかに民俗音楽と特定できるのはp.102, 166の2箇所である。

さて、このように、「先住民文化」と「地域性」の希薄さが伺える一方で、本書2冊には、（主にロック音楽に関係する、または含まれる）音楽ジャンル名が頻繁に登場する。英米の（主流の）ロックやフォークの著名アーティストの影響を示す記述に加えて、やはり英米の（非主流の）ガレージ、サイケデリック、ヘビー・メタル（ヘビメタと略すこともある）、プログレッシヴ（プログレと略すこともある）、ファンク、パンク、ニュー・ウェーブ、ポスト・パンク、オルタナティブ（オルタナと略すこともある）、ハードコア、ヒップホップ、インダストリアル、エレクトロニック、アンビエント、ミニマル、テクノ、ハウス、アシッド・ジャズ、アシッド・フォークなど様々である。これらのジャンルについては Gammond (1991) や、多くのウェブ・サイト等から容易に情報が得られるため、そちらに譲るとして、以上の記述から読みとれるのは、英米（英語圏）音楽文化の強い影響とそれらへの追従、音楽市場への意識、自国文化へのこだわりの希薄さ、であろうか（大半のアーティストは英語で歌っている）。

評者の「北欧ポピュラー音楽」の印象は次の通りである。洗練、安っぽさ、素朴さが同居した、お洒落でいて、どこか垢抜けない音楽。英米のロックやフォークの美味しい要素をたくさん採り入れた、聴いていて素直になじめる音楽。英米のルーツ音楽（ブルースやカントリーなど）に影響を受けても、「土臭さ」が感じられず、アーティストたちは皆、「高学歴」っぽい。独自の「哲学」を持ち、自分たちの「立ち位置（拠り所）」を探しているような、大地に足がついてないような、浮遊感を漂わせる音楽・・・独断と偏見かもしれないが。

#### 4. 情報の偏り×思考停止＝「北欧美談」

さて、本書2冊において、これまで未知だった情報が大変多く盛りこまれた一方で、評者が望んでいた情報がほとんど無しという悲惨な？結果は、最初に述べたわが国における「北欧情報」の偏りと相通ずるものがあるように思われる。最初から偏っていたかもしれない（しかし、地理上・言語上の制限ゆえに容易に検証できない）「北欧情報」に加え、「フィルター」（音楽的背景、思い入れ、こだわり）が作用した結果、そうなったとなれば、それは「思考停止」以

外の何物でもない。そして、思考停止が新たな情報に対してさらなる思考停止を誘発し、ポジティブな「北欧」像にますます拍車をかけるとしたら…こうして「北欧美談」が成立するのではないだろうか。したがって、本書2冊は、編集者の努力と情熱、成果について賞賛に値することは間違いないが、深読みすれば（インディーズであるにもかかわらず）日本人が一般に思い描く「北欧観」の枠内からは出ておらず、逆にそれを心ならずとも結果として支えるというネガティブな意味において、現在入手可能な最高の「北欧音楽書」と言えるかもしれない。

これは、「たかがポピュラー音楽、どうでもいいですよ！」などと笑って済まされる話ではない。驚くべきことに、『民族学研究』（現『文化人類学』）の創刊（1935年）から今日に至るまでのおよそ73年間で、北欧諸国（サーミ関係含む）に関する論文は、葛野（1989）のサーミ研究を除いてほぼゼロである。なお、本学会においても三上（2004）、沖野（2005）のサーミ研究を除けばほとんど見られないのが現状である。

情報の偏りと思考停止は、ポジティブとネガティブ、美談と醜聞、そして差別と偏見にも通じかねない。18世紀フランスの思想家ルソーがかつてアイヌなど地球上の先住民に対して「高貴なる野蛮人」と賞賛したこと（クライナー、1999）がトラウマ（?）となって、19世紀欧米における単系文化進化論（財部、2001）の「悪夢」が再びわれわれを襲うかもしれないのである。

## 5. 終わりに～余談

「悪夢」と多少なりとも関係あるかもしれないが、北欧では（特に日照時間の短い冬には）うつ病患者や、アルコール中毒患者が多いそうである。近年は移民の増加に伴い、日本人旅行者には見えにくい人種差別問題もくすぶっている。それらと関係があるのかは不明だが、スカンジナビア航空では冬季にタイ直行便を運行しており、スウェーデンをはじめとする多くの北欧の人々が東南アジア方面でバカンスを楽しむそうだ。2004年12月26日に発生したスマトラ沖地震の津波で多くのスウェーデン人が犠牲になったことは記憶に新しいが、これらは寒冷な「北方圏」地域に「適応」して暮らしている（らしい）という都市伝説もどきの「美談」には全くふさわしくない話題である。

先日、かつてお世話になった元ホストファミリーに会うために、再びスウェーデンを旅した妻の目撃談によれば、アーランダ国際空港から高速道路でホストファミリーの家（ストックホルム近郊のソルナ市）に向かう途中の浴場で、見間違えでなければボルボとルノー（フランス車）の店舗が同じ敷地内にあるのを見て変な気分になったそうである。実際にストックホルム市内でもボルボはあまり見かけず、フォルクスワーゲン（ドイツ車）やプジョー、シトロエン（いずれもフランス車）などの「大衆車」が多いとのこと。以前はフォルクスワーゲンだったホストファミリー夫妻も今はフランス車に買い替え、物価（消費税）やガソリン代の高さをぼやきながら、毎日酒を飲み（ただし、すこぶる健康）、冬休みはタイに行くそうだ。昔、妻が留学中の2月頃、キルナ（スウェーデン北部の都市で、前述のアイス・ホテルがある）に行く際、その夫妻から強烈な一言を返された。「お前は何でそんな寒いところに行く？ クレージーだ！」…さて「北欧」の実像とはいったい？ そして音楽はいかに？

## 参考文献

天辰保文

2008 「ミラ～春を運ぶ温かな歌声」『北海道新聞（夕刊）』（2月25日、「天辰保文の音楽アラカル

- ト」420) p.2  
 Broughton, S., et al.  
 1994 *World Music-The Rough Guide*. Rough Guides Ltd, London.
- Gammond, Peter  
 1991 *The Oxford Companion to Popular Music*. Oxford University Press, New York.
- 伊藤英嗣 (編集)  
 2008 『クッキー・シーン』VOL.59, p.117
- クライナー・ヨーゼフ  
 1999 「ドイツにおけるアイヌ観、アイヌ研究並びにアイヌ・コレクションについて」財団法人アイヌ民族博物館 (編) 『アイヌ工芸品展 テケカラペー女のわざ ―ドイツコレクションから―』(平成 10 年度財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構展示事業) 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、(pp.11-17.) p.11
- 葛野浩昭  
 1989 「トナカイの耳印と遊・放牧社会の歴史―フィンランド、ウツヨキ地域のトナカイ放牧組合を例に―」『民族学研究』54 (Ⅱ) : 113-136.
- 三上欧介  
 2004 「移民としてのスコルトサーミとそのエスニック・アイデンティティ」『北海道民族学会通信』2003 年度 : 6-7.
- 並木厚憲ほか  
 2008 「特集／北欧はここまでやる。一格差なき成長は可能だ！」『週刊東洋経済』第 6120 号 (1 月 12 日号) : 36-77.
- 沖野智子  
 2005 「サーミ政策史―古代から現代まで―」『北海道民族学会』創刊号 : 69-85.
- Sadie, Stanley  
 1980(Reprinted 1995) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians, in twenty volumes*.
- 芹澤一美  
 2004a 「北欧音楽療法紀行 1―音楽とともに在る―ノルウェー編」『the ミュージックセラピー』4: 4-23.  
 2004b 「北欧音楽療法紀行 2―音楽とともに成す―スウェーデン編」『the ミュージックセラピー』4: 70-77.
- 財部香枝  
 2001 「20 世紀初頭のアメリカ社会のアイヌ・イメージ―フレデリック・スターの新聞記事切り抜きから―」小谷凱宣 (編) 『在外アイヌ関係資料にもとづくアイヌ文化の再構築』(南山大学人類学研究所) pp.1-40.
- 渡部千春  
 2006 『北欧デザインを知る―ムーミンとモダニズム』日本放送出版協会 (生活人新書 170)

#### 参考CD

- 湯浅学 (解説), 幻の名盤解放同盟 (監修), 中原美樹ほか (歌・演奏)  
 2007 『THE BEST OF 幻の名盤解放歌集～王道 地獄に近い HEAVEN』(P-VINE RECORDS PCD-7301) p.1
- ミラ (歌)  
 2008 『ミラ・ボッサ』(Amuse Inc./Spice of Life PBCM-61029)

#### 参考 Web サイト

- エアギタージャパンオフィシャルウェブサイト <http://airguitar.jp/news/>  
 アマゾン <http://www.amazon.co.jp/>  
 クッキー・シーン <http://www.bekkoame.ne.jp/ha/p-market/>  
 株式会社ブルース・インターアクションズ <http://www.bls-act.co.jp>  
 P-VINE RECORDS <http://www.p-vine.com>

(おきの・しんじ／北海道東海大学)